
イチロー～天才の苦悩～

尾綿洋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イチロー〜天才の苦悩〜

【Nコード】

N2727U

【作者名】

尾綿洋

【あらすじ】

天才打者イチローにはあるコンプレックスがあった。その苦悩と戦い続ける男の素顔を描く。

「イチローササキー！」

俺の名前がコールされると球場が一気に湧き上がった。九回の裏二死走者無し、同点で左のバッターボックスに入ると、ゆっくりと腰を下ろし、がに股になり、体全体を大縄を回すように大きく3回回した。

俺がこの動作をすると観客も続けて同じ動作をし一段と球場がヒートアップした。この動作は予告サヨナラホームランをするときに行うもので、ティロフィナーレと呼ばれている。

俺がティロフィナーレを終えると、ピッチャーは面食らった様な表情をし、投球動作に入った。ピッチャーから放たれた球は真ん中高めの甘い直球だった。俺はそれを振り抜くと、カキーンと快音を響かせレフトスタンド吸い込まれていった。

観客の興奮はこの試合で最高のもとなった。俺はゆっくりとダイヤモンドを走り、ホームベースに到達すると仲間から抱きつかれたり叩かれたりと手荒い歓迎を受けた。

そして、試合終了と同時にヒーローインタビューが始まった。

「今日のヒーローは勿論この人、イチロー選手です」

帽子を取り軽く会釈をした。会場はイチローコールで埋め尽くされた。

「イチロー選手、ティロフィナーレをしたということは狙っていたんですかね？」

「当然です。打てるとわかっていましたから」

「手応えはどうでしたか？」

「打った瞬間入るとわかりました。コースも甘かったですし、難なく打てました」

「最後にファンに一言お願いします」

「オリンポス・ブルーフェイスは今年優勝しますので応援に来て下

さい」

会場にどよめきが起こった。

「ティロフィナーレに続いて予告優勝ですか、これは期待しましょう。今日のヒーローはイチロー選手でした」

俺はインタビュウを終えるとロッカールームで着替えを始めた。

「凄い体毛やな。まるでゴリラやな」

同僚のTポーンティ-岡田が言った。

「うるさい、俺はこの体毛で苦労してるんだ」

と言り返した。

「へえ、そうなんか？どんな事で苦労してるのか言うてみい」

Tポーンが食いついてきた。

「俺がこの体毛で苦労し始めたのは高校生の頃からだった。地元のリトルリーグから名門ろうげんだいがくめいでん老前大学明伝高校、通称老前明伝ロゼンメンテンに入學したばかりの頃、慣れない寮生活のストレスに悩まされていた。そんなある日、気が付くと全身の体毛、特に胸から腹にかけて地肌が見えないくらい毛が生えてきた。それからというものヘッドスライディングをするたびに摩擦の熱で地肌が火傷し毛がチリチリになってしまった。ある日ヘッドスライディングが原因で胸に怪我をし、入院していると医者から野球を諦めろと言われた。そこで俺はヘッドスライディングをしなければ野球をやってもいいかと聞いてみたところ、医者は認めてくれず、野球が出来ないなら死んでやると脅しをかけたらようやく野球をすることを認めてくれた。それからというものヘッドスライディングを封印して野球をしている」

「あはは、そいつは気の毒なこった」

Tポーンは笑いながらそう言った。

俺は内心苛々しながらロッカールームを後にした。

数日後、俺の体毛の事はチーム内は疎か、ファンの間にまで知れ渡ることになっていた。

「イチロー、毛は剃ってきたか？ハハハッ」

チームメイトの一人が面白そうに言った。俺は少しムツとした。しかし、俺にはある信念があった。親から頂いたこの大切な体を傷つけないのだ、例え毛を剃るような事でも俺にはとても勇気がいるので未だに出来ないでいる。

そうこうしている内に試合が始まる。俺はいつものように右翼の守備位置に着いた。右翼とは言っても政治的思想は左翼である。試合中、応援に混じって汚いヤジが飛んで来る。ヘタクソだの、落球しろだのはいつもの事だが、それに加えて毛深いとヤジを飛ばされるようになった。それでも俺は黙々とプレーをする。

そんなある日の事、試合を終え帰宅しようとしていると一人の男が現れた。

「月間剛毛の者です。少しお時間を頂けませんか？」

俺は剛毛と聞いて少し頭に來たが、試合が早く終わって時間もあつたので承諾することにした。

男の案内に従って事務室らしき場所へ連れて來られた。

「今日はイチロー選手とスポンサー契約を結びたいと思ひ参りました」

俺は驚いて座っていた椅子から数センチ浮いた気がした。

「契約の内容は、弊社の広告塔になって頂き、月間誌に1年契約で出演して頂く事になります。契約料は1億円です」

1億円……、自分の耳を疑った。現在球団と結んでいる年俸は3千万円である。

「契約の内容は、写真撮影やインタビューに答えて頂くことになります。剛毛の素晴らしさを日本全国へ伝えることが弊誌のモットーであります。イチロー選手程の筋肉隆々の肉体と甘いマスクをもつてすれば弊誌の売り上げは留まる所を知らないでしょう」

「自分はこの体にコンプレックスを持っているが、読者は受け入れて貰えるのだろうか」

質問をぶつけてみた。

「弊誌では、毛が濃い人間が好きで読者と、あなたのようなコンプレックスを持った読者がいます。後者のような読者に勇気が出るようなメッセージを送って頂けると良いと思います」

俺は決断した。

「そういう事なら契約をしたい」

「それでは、契約成立ですね。おっと、忘れるところでしたが、この契約には1年間弊誌に出演して頂くことが条件となります。もし、違反した場合には掲載月数掛ける10万円しか支払われませんのでご注意ください下さい」

「わかったその条件を受け入れよう」

こうして俺は契約書にサインをした。

「それでは、後日インタビューと写真撮影を行いますのでよろしく願います」

こうして、契約を結ぶと握手をし、後日またここで会うことになった。

数日後、試合を終えると月間剛毛の記者が待ち構えていた。

「イチローさんお待ちしております。では、まずインタビューから始めさせていただきます」

そう男は言つと別室へ案内された。

「それでは、インタビューを始めさせていただきます。まずは自己紹介をお願いします」

「オリンポス・ブルーフェイス所属のイチローこと佐々木一浪ささきいちろうです。プロ3年目で去年暮れからライトのポジションでレギュラーを獲りました。趣味は蟻の飼育です」

「プロ入団後1年半の間1軍と2軍を行き来していたようですが、そのときの心境はどうでしたか？」

「なかなか自分のがに股トルネード打法が認められなくてイライラしていましたね。早く一軍でレギュラーの座を獲得したいと思っていました」

「今日の活躍は見事でした。5打数5安打の大活躍でしたね。4月16日現在、打率は0.401とトップですが感想はありますか」
「意外とあっさり首位打者になれるんだと思いました。まだまだ、打率を上げていけるんじゃないかと思えます」

「体毛の処理はどうしているのですか？」

「髪の毛と髭以外はしていません。親から頂いた体を傷つけないかと思っ

ているので、毛を剃ることですら抵抗があるのです」

「剛毛で困った事はありませんか？」

「ヘッドスライディングが出来ないことです。してしまうと擦れて大怪我をしてしまうのです」

「逆に剛毛で良かった事はありませんか？」

「そうですね……、体を洗う時石鹸の泡立ちが良い事ですかね？」
こうして小1時間ほど俺はインタビューに答えると、写真撮影が行われた。予め用意された衣装に着替えるとカメラの前に立った。途中から上着を脱いで撮影されていたが、カメラマンからいい体だねと褒められた。体毛の事で馬鹿にされる事が多い中、褒められた事は素直に嬉しかった。

こうして取材の仕事は終了した。記者からこの雑誌が発売されるのは毎月1日だと教えられた。なんでも数字の1が毛が直立しているイメージから発売日が1日にしてあるそうだ。

5月1日の朝、コンビニで月間剛毛を見つけると、表紙に俺の上半身裸の姿がでかかと印刷されていた。これを購入するとすぐさま自分の記事を読んだ。見出しはこうだ、天才野獣系男子現れる！そして、数ページに渡ってインタビュー記事と写真のページがあった。自画自賛になるが写真写りが良いと思った。満足して月間剛毛を読み終えると、ナイターゲームに向けて練習を開始した。

練習を一旦終え球場を見渡してみると、サインをせがむファンがいつもより沢山いることに気がついた。子供や女性客は勿論の事、男性客の割合がいつもの数倍いることに驚いた。サインをしている

だけで、一時間が過ぎていた。途中男性客から色目使いをされたような気がするが、気のせいであろう。

そして、試合が始まる。今日の試合相手はオリンポスと1位争いをしているハードバンクホークスだ。

俺はいつものように右翼のポジションに着いた。繰り返すが政治的思想は左翼である。

いつもヤジが飛んでくるが今日は少ない、雑誌の効果だろうか。それにいつもより野太い声で応援されている気がする。

1死3塁のピンチ、飛球は俺目がけて飛んできた。俺はそれを捕球すると3塁の走者は走り出しタッチアップを試みた。すぐさま俺は本塁に返球した。まるでレーザービームのようなその球は会場を一瞬沈黙させた。そして、走者が本塁に届く寸前のところで捕手が捕球しタッチアウトに仕留めた。球場からは歓声が上がった。

打っては5打数4安打の大活躍でヒーローに選ばれた。試合後のヒーローインタビューでは今日の活躍と月間剛毛に登場したことを聞かれた。インタビューからファンになりましたと言われ、思わず苦笑いをした。

それからというものの鰻登りの人気で、球場のみならず街でも人に会うたび挨拶されたり、サインをせがまれたりした。

そんなある日の事一人の美しい女性が現れた。

「あの、イチローさん付き合ってください」

突然頭を深々と下げられた。

「いきなり、びっくりするじゃないか。でも、今時間あるし、喫茶店で話そうか」

女性は目を輝かせて、ありがとうございますと言った。

「俺のファン？いきなり付き合っちゃって言われてもねえ……」

「私、イチローさんの事が大好きなんです。入団した頃からずっとファンでしたが、この間月間剛毛でイチローさんの事を取り上げていて、その剛毛を見てから運命の人はこの人だと確信しました」

「そんなに好きなのか……俺趣味が合わない人とは付き合えないよ」
女性の目付きが変わった。

「私、大学で蟻の生態について研究していました。卒論のテーマは蟻が人間生活に於いて有用であるかというもので、食用になる他、観用生物にも適していると論文を書きました。私の専門はクロオオアリです。あのスリムで真っ黒なフォルムはまさにこの世のものは思えないほど美しいです」

俺はパンと手を叩き。

「俺もクロオオアリが好きなんだ。こんなマイナーな趣味が合う人がいるとは思はなかった。名前と年齢を教えてください」
女性は嬉しそうに。

「名前は福嶋弓子^{ふくしまゆみこ}24歳、KO^{けいおう}大学出身です。好きなタイプはイチローさんのようにかっこ良く毛深い人が好きなんです」

「年上なのか、福嶋さん若々しいね。俺まだ21だからなんて呼べばいい？」

福嶋は恥ずかしそうに。

「弓子でいいわ」

「何？ユニコーン？」

「弓子やっちゅうねん」

「ああ、弓子ね。俺の事はさん付けしなくていいよ」

「じゃあ、いつ君て呼んでいい？」

「いいよ、それじゃあそろそろ時間だから帰るわ」

「今日はありがとうっ君」

こうして、弓子と付き合うことになった。

それからというもの弓子は試合のたびに顔を見せるようになり、暇な日にはデートによく行った。そんな7月の中旬のある日俺と弓子は福島県へ海水浴に出かける事になった。

「こんにちはワン」

弓子が挨拶してきた。

「ちはー」

俺がそっけなく返事すると。

「違う、こんにちワンっていうの。挨拶の語尾に動物の言葉を入れるの、これは挨拶の魔法と言って仲良くなるための魔法の言葉なの。そんな言葉を無視して。」

「それじゃあ行くか」

俺と弓子は買ったばかりの2000万円もするコンフォートに乗り込み福島の海へ向った。

「海ってやっぱりわくわくするよね。さっきの話の続きんだけど、挨拶すると恋人同士ポポポーンで感じで仲良くなれるんだって」
俺は意味のわからない言葉を無視して黙々と目的地へと車を走らせた」

数時間後。

「やっと着いたね。ありがとうウサギ」

「どういたしましテナガザル」

「うん、その調子」

弓子は笑った。

俺は水着に着替えると。

「うわ凄い剛毛、うっとりしちゃう。触ってもいい？」

俺は一瞬躊躇ったが。

「いいよ、触っても……」

「ありがとうウサギ」

そう言うと、胸毛をつままれたり引っ張られたりした。少しくすぐったかった。

「それじゃあ、海で泳ごうか」

「いいわね、放射性物質は体に良いつて聞くし、泳ぎましょ」

こうしてしばらく遊び、日が暮れてくると、弓子が俺の手を取り何か言いたげな表情をしていた。

「どうしたんだ？」

「あの、言いたい事があるの……」

「何？」

「私と結婚してください」

弓子は深々と頭を下げた。俺は驚いて心臓からポポポーンという音が鳴っていた。

「わ、わかりました。俺の方からもよろしくお願いします」

俺も頭を下げた、頭がパーンとなり真っ白の状態になっていた。

「それじゃあ、明日婚姻届を提出しましょう」

「うん……」

俺と弓子はその場で抱き合った。こうして、俺と弓子は結婚することになった。

それからというものは公私共に充実していた。チームは俺の活躍により首位をひた走り、家に帰れば弓子が待つており、手作り料理を食べさせてくれたり、一緒に蟻の飼育をしていた。

そして9月の終盤、優勝までのマジックを残り1となり3位の東北楽天家ゴールデンボギーズの試合が行われようとしていた。俺はいつものように準備運動と練習をし、試合に備えた。

そして試合が始まった。俺のチームは先行であり1番打者であるので打席に1番最初に向った。いつもより声援や応援が大きかった。黄色い響く声の中に重低音の野太い声がこだまする。

第三球目、内角やや高めのスライダーを振り抜いた。快音を響かせスタンドに吸い込まれていった。

ダイヤモンドを駆けるとスタンドでは耳をつんざくような声援が巻き起こっていた。

1点を先制してからというものの投手戦となり、お互い一点も入らずに9回の裏を迎え、2死満塁のピンチにバッター一平を迎えた。

一点も許せない場面に緊張が走る。場内ではあと一人コールドが起こっていた。

第5球目、一平がライト前に落ちるかというフライを放った。俺

は一目散に前進する。しかし、このまま行くとほんの数十cmといふところで届かない、そこで俺は決断する。

俺は打球に向かって勢い良く飛びついた。するとなんとか捕球することが出来た。しかし、この捕球の際、胸から腹にかけてひどく擦った。

この瞬間に我がチームのシーズン優勝が決定し、球場はお祭り騒ぎになっていた。しかし、俺は立つことが出来ない、胸のから腹にかけて焼けつくような痛みが俺を襲う。そして、視界が真っ暗になっていった。

気がつくと俺はベッドの上にいた。側には弓子がいた。

「いつ君、2日も目を覚まさなかったのよ」

弓子は泣いていた。
数分後医者が見れた。

「あなたは打球に飛びついた際、胸から腹にかけてひどく擦りむきやけどを負っています。治療するには皮膚移植と永久脱毛が効果的ですが、家族の方からそれだけはやめてくれと言われたので、応急処置だけしておきましたが、どうなさいましょう?」

「その治療をすると毛が無くなるのですか?」

「そうです、毛が無くなりますし、怪我無くなります」

俺は頭が混乱した。俺は毛のお陰で、人気者になれたし、スポンサー契約も出来たし、結婚も出来た。しかし、毛が無くなると全て失ってしまうような気がした。

「毛が無くなる治療をしなければ、どれだけの期間で治りますか?」

「早くて半年後でしょう、しかしながら野球が二度と出来ないかもしません」

「弓子お前はこの治療に賛成か反対か」

弓子は言いにくそうに。

「私、毛の無いいつ君なんて考えられない、離婚してもらいます」

俺は絶望的な気分になった。

「ちよつと考えさせてくれ」

俺は考えた。治療をしたら女と金をと毛全てを失ってしまう。この間買ったスポンサー契約が無くなればコンフォート買ったせいで5百万円程の借金が出来てしまう。しかし、俺が本当に失いたない物はない。野球だ、俺は長い間夢見てきたプロ野球選手なんだ。活躍すれば失ったものを取り戻せるかもしれない。

「わかったやります」

「皮膚移植手術は明日行います。いいですね？」

「はい」

俺は力強く返事した。

「それじゃあ、私とお別れね、明日離婚届を提出してくるわ」

「わかった」

俺は悲しかった。だが、決断したからにはもう戻れない。

「さよなライオン」

弓子はそう言い残り病室から出て行った。

翌日手術を受け、麻酔から覚めると月間剛毛の担当者から、契約を破棄させてもらうとの連絡が入った。こうして俺は女と金と毛全てを失った。だが、ここで諦めてはいけないと自分に言い聞かせた。動けるようになった翌週からリハビリに励んだ。移植して強張った皮膚を元の状態に戻そうと懸命になった。その後、俺がリハビリに取り組んでいる間、チームはリーグ優勝でシーズンを終えた後、クライマックスシリーズを制していた。

チームがクライマックスシリーズ制した翌日ついに退院の許可が降りた。医者に抛ると退院まで3ヶ月は掛かると見込んでいたが、驚異の回復力を見せ、一ヶ月ちよつとで退院することが出来た。だが、安心は出来ない。日本シリーズに向けて急ピッチで体を仕上げなければならぬ。それからというものシーズンの練習よりハードな練習を自らに課した。

そして、セ・リーグの覇者、読買ジャイアンツと我がチーム、オリンポス・ブルーフェイズが3対3で迎えた日本シリーズの最終戦俺はベンチ入りする事になった。

試合は2対0の2点ビハインドで9回表を迎えて岡田監督が選手の交代を告げた。ピッチャー寺原から小林そしてライト赤田から俺に交代した。

小林と俺は大声援で迎えられた。しかし、小林は乱調で先頭打者に四球を与えると後続に安打を許し無死1、3塁とした。続く打者がスクイズを決め、点数を3対0とし、なお一死ランナー二塁。続く打者に安打を浴び、一死1、3塁。だが、ここは小林が踏ん張り次の打者を三振に仕留めたが、次の打者に四球を与えてしまう。

2死満塁の場面で、バッター4番のラミレス。外野は長打を警戒し後進守備隊形をとる。

そして、第2球目、打者の放った飛球はライト前に落ちるかと当たり。俺は全力で追いかける。球場から悲鳴と歓喜の入り交じった声援が埋め尽くしていた。

俺は思いつきり打球に飛び込んだ。グラブにはボールの重みが感じられた。

「アウト」

審判がそうコールすると俺は立ち上がった。以前のような痛みは無かった。手術したことにより今まで出来なかったプレーが出来るようになった。俺は一人泣いていた。

攻守交替すると今度はこちらの番だ。先頭バッターが出塁すると続くバッターも四球で出塁した。しかし、後続の2人の打者が三振に倒れる。だが次のバッターがファールで粘り四球で出塁。点数3対0、2死満塁のチャンスで俺の番が巡って来た。

イチローコールが響く中、息をふうーっと吐いてバッターボックスに向った。

バッターボックスに入るとゆっくりと腰を下ろし、がに股になり、

体全体を大縄を回すように大きく3回回した。

俺のティロファイナーレに観客は騒然となった。観客も俺と同様に腰を下ろし、がに股になり、体全体を大縄を回すように大きく3回回した。

ティロファイナーレを終えると同時にピッチャーが投球動作を始めた。

投手から放たれた球はまるで閃光のように速かった。

「ストライク」

外角低めのストレートだった。場内の球速表示では152 km/hと表示されていた。

第二球目が手から放たれようとしていた。それに合わせてスイングを開始する。なんだか体が軽い、こんな幸せな気持ちで戦うなんて初めて……、もう何も怖くない。

内角低めのストレートをすくい上げるようにスイングした。強烈なライナー性の打球はライトスタンドに吸い込まれて入った。この瞬間オリンポス・ブルーフェイスの日本一が決まった。

俺はダイヤモンドを駆け抜けると仲間から祝福され、胴上げされた。

その後ヒーローインタビューが始まった。

「今日のヒーローは見事なファインプレーとサヨナラ満塁ホームランを放ったイチロー選手です」

歓声がわーっと盛り上がった。

「満塁ホームランの感触はどうでしたか？」

「内角低めのストレートだったんですけど、力がうまく抜けて力まらずに打てましたね」

「怪我から復帰したばかりでこの活躍、見事でした」

「ありがとうございます。野球ができず鬱憤が溜まっていたんで、こういった最高の形で発散できて良かったです」

「ブルーフェイスは日本一になりましたがどの様な気持ちでいますか？」

「素直に嬉しいです」

「最後にファンの皆様へメッセージをお願いします」

「応援してくださったファンの皆様に感謝しています」

「それともう一言言っていていいですか？」

「どうぞ」

「弓子！俺ともう一度やり直してくれ！！！」

「以上イチロー選手のヒーローインタビューでした」

俺は帽子を取り手を振って観客の声援に応えた。

その後俺は、9回表にファインプレーした事とサヨナラ満塁ホームランを打ったことで、

MVPに選ばれ500万円の賞金を手に入れた。これで、コンフォートで発生した借金はチャラになった。

オリンポス・ブルーフェイスが日本一を決めた数週間後、チームは優勝旅行としてヨハネスブルクへ来ていた。

「ここは犯罪都市ヨハネスブルクや、油断していると殺されるかもしれへんで、まあ、ワイ達のようなスポーツ選手なら大丈夫やろ」とTポーンが言った。

「あつ僕の財布がない」

チームメイトが早速盗難に遭ったようだ。

この後恐る恐るこの街を観光した、途中銃声が2、3度聞こえたが気のせいであろう。その後、テーマパーク、ゴールド・リーフ・シティに向った。

ここではジェットコースターや様々なアトラクションがありとても楽しめた。

数時間遊んだ後、帰ろうとすると目の前に見覚えのある女性が立っていた。

「来てしまったわ、円環の占いに導かれて」

女性はゆっくりとこちらに向かって歩いてきた。女性は弓子だった。「どうしてここにいるんだ？」

弓子は少し笑って。

「あなたがもう一度やり直してくれって言ったじゃない。私はその言葉を聞いてやり直そうと思ったの。毛が有る無いなんて関係ない。私はあなたが好きなの。再婚してください」

「それを言いに来るためにここに来たのか？」

「そうよ、もう一度やり直したいという一心で」

「それにしてもなんでここにいるとわかったんだ？」

「聞こえなかった？ 円環の占いに導かれてきたのよ。有名な細木数の子にいつ君にどこで出会えるか占ってもらったのよ」

「それからね、アフリカで珍しいモノを手に入れたの」

弓子は鞆から瓶を取り出すと蓋を開けて中を見せた。

「これ、アフリカ産のサスライアリって言うの珍しいでしょ、また、二人で仲良く育てましょ」

「俺ももう一度弓子と一緒に暮らして、蟻を飼育したいよ。弓子お前の事が好きだ。再婚しよう」

俺は弓子を抱きしめた、懐かしい温もりが手から伝わってきた。俺は一時女も金も毛も失ったが、女も金も再び手に入れることが出来た。毛は失ったままだが、それ上回るだけの幸福を俺は手に入れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2727u/>

イチロー～天才の苦悩～

2011年6月24日13時32分発行